

田中 允編

朱刊謡曲集

続十

古典文庫

田中 允 編

朱刊謡曲集

続十

古典文庫

古典文庫第五四八冊

平成四年七月二十日印刷発行

非売品

集曲謡未刊

十続

編者

田中

允マコト

発行者

吉田幸一

印刷者

共立印刷株式会社

発行所

114

東京都北区西ヶ原
三ノ三四ノ一二

古典文庫

電話 (三九一〇) 二七一七
振替口座東京九一四五七九番

目次

凡例

.....七

各曲解題

.....一一

本文

東光坊

.....(二).....一二

東心坊異本

.....(二).....二九

桃青

.....(四).....三四

燈台

.....(二八).....四二

常盤(山中常盤)

.....(二八).....五三

時宗附青丹吉

.....(二二).....五八

土佐日記		(二四)		一七一	
鳶	福王流系異本(鳶窟)		(二五)		一七七
鳶	金剛流系異本(全右)		(二五)		一八五
鞆の浦		(二八)		一九一	
豊国詣異本		(三一)		一九六	
豊国詣金剛流新作		(三五)		二〇三	
虎	送異本(虎送曾我)		(三八)		二一二
鳥の跡	附浜本本解題		(四二)		二二八
鳥之栖	版本		(四五)		二三五
鳥之栖	異本		(四五)		二三六
鳥辺	野附石田本解題		(四八)		二四三
中入猩猩々前 の 異本(猩猩々前・一番猩猩々)					

大猩猩・猩猩・本末猩猩・二人猩猩?		(五三)		二五一
一番猩猩全右(全右)		(五三)		二五五
一番猩猩全右(全右)		(五三)		二六〇
猩猩前異本(全右)		(五三)		二六四
猩猩前異本(全右)		(五三)		二六八
長 柄異本(長柄橋・長柄人柱)		(五七)		二七二
長 柄復曲本(全右)		(五八)		二八一
名古曾		(五九)		二八九
名 尽(名尽謡)		(六〇)		二九六
七見草		(六六)		三〇五
難波堀江(善光寺ノ謡・阿弥陀の池)		(六七)		三一五
なよたけ物語		(六八)		三二一

成田山異本		(六九)		三二七
南叡山		(七二)		三三五
南 帝 (加納)		(七三)		三四二
南都炎上		(七三)		三四九
二井寺		(七四)		三五七
二月堂		(七六)		三六五
錦 錦織の異本 (錦織)		(七六)		三七八
西の宮復曲本		(七八)		三八五
似せ菊異本		(八四)		三九六
二 宮原作		(八五)		四〇三
二 宮改作		(八五)		四〇九
爾靈山		(九四)		四三二

尼連禪河（印度の仏跡）	（九六）	四三〇
人 魚	（九八）	四四〇
乃木夫人	（九九）	四四八
野口判官異本（野口・野口天狗・高館・判官・天狗・衣川・教心？）	（一〇〇）	四五九
後の羽衣原作	（一〇二）	四六四
後の羽衣短縮改作	（一〇二）	四七四
後の羽衣改作	（一〇二）	四七九
教 經別曲	（一〇九）	四八三
宣 長	（一一〇）	四八八
矩の松原	（一二二）	四九七
範 頼福王系異本	（一二四）	五〇四

範	
賴上杉異本	 (一四) 五一〇
追記・訂正	 五二六

凡例

一、本文庫の『番外謡曲角淵本』正統二冊計五十二番、『未刊謡曲集』三十一冊計一五二六番、合計一五七八番、『謡曲叢書』三冊、『新謡曲百番』、国民文庫本『謡曲全集』上下巻、国書刊行会本『宴曲十七帖附謡曲末百番』、日本名著全集本『謡曲三百五十番集』、『謡曲評釈』九冊（謡曲叢書本以下は重複曲多く、重複しない総数は約六百番）などの、図書館などで比較的閲覧し易い、まとまった諸本に見られる曲を除き、残余を五十音順に配列して続編とし、この続第十冊では「東光坊」から「範頼」までの五十三番を翻刻した。

二、翻刻はすべて原本通りを原則としたが、私意を加えた所はすべて（ ）でくくった。また各曲解題の所でも、原典を引用した所の中の私註は同様に（ ）でくくった。

三、原典には段落のない場合が多いが、編者の見識で適宜改行した。

四、節付は印刷の都合上省略せざるを得なかったが、稀に節付のない写本もある。

り、また活字翻刻本しか見当らない曲は勿論節付省略本であるから、これらは原典に既に節付がなかった曲である。これらの点は解題で触れた。

五、「次第」「一セイ」「舞」などの演出上の重要記号はできるだけ残したが、囃子の打切を意味する「打切」「切」「ウ」、間拍子を意味する「ヤ」「ヤア」「ヤヲ」「ヤヲハ」、地拍子を意味する「トリ」「片地」「ヲクリ」などの特殊記号は省略した。

六、「印は原典に固執せず、詞の所（節付のない所）は「節の所（ゴマ譜のある所）」はへを付けて区別した。

七、句点は原則として原本通りにしたが、元来句点は節譜の一種であつて（句点は必ずそこで息を一旦切り次を謡えという謡い方の記号）、韻文の切れ目とは必ずしも一致しないから、韻文（節付のある部分）の拍子合わずの所は七五調を基本とする一節を原則として一句と考え、拍子合いの所は八拍子を基準とする一区切を一句とし、これらの区切の所に編者の見識で句読点を付けた。この場合原典に句点のある時はそのままにし、句点のない時は読点を付

けて区別した。また詞の所も原本が句点を脱している場合は、これまた編者の見識で読点を付けた。謡本に読点はない。

八、濁点は、原本にある場合、異本を参考にして補った場合、編者の見識で補った場合の三つに分けられるが、清濁いずれか決し難い場合はそのままにした所もあり、また注意すべき所は私註で私見を述べた。

九、曲名の下の「」でくくった番号は、未刊謡曲集一の最初の曲を一とし、それからの通し番号である。したがって角淵本番外謡曲からの通し番号は、これに五十二を加えればよいことになる。

十、謡曲の専門的な術語については、『未刊謡曲集』三十一附載の拙稿「謡曲の音楽的研究」を参照して頂きたい。但し右の拙稿には校了後、組版の時に印刷所側に過失があり、二二五頁の初行全部を二二四頁の初行に移行して読んで頂きたい。

本巻作製にあたっては大勢の方々の御厚意による所が多いが、中でも故人では石田元季・井上嘉介・江崎金次郎・江島伊兵衛・観世左近・高安六郎・

横山柚人、現存の方では、伊藤正義・大島久見・梶井厚佑（旧名達男）・金春
信高・竹中宏・堂本正樹・西野春雄・藤城継夫・前西芳雄・山本勝一・吉田
幸一の諸氏、また解題中に述べた各公共機関の暖い御協力を得た。厚く御礼
申し上げます。（一九九二年一月十八日記す）

各 曲 解 題

東光坊(とうくわうぼう)家藏近世中期頃寫し樺表紙本にのみ見える珍曲。底本は觀世流節付だが、ゴマ点は要所のみ記し、完全ではなく、また朱での訂正が散見し、翻刻はこの訂正によった。名寄類では法政大学能樂研究所藏、元禄四年(二六二)九月十六日、桮治汝謙筆寫の『謳百番目録』に見えるのみ。本曲と同工異曲に、仙台本第一種の「鞍馬判官」(未刊謡曲集九に翻刻)があり、前半は同文の所が多いが、後半は全く異なる。鞍馬判官の方は、貞享四年(二六八)版『能訓蒙図彙』所収「謡目録国付」以下多くの近世の名寄類に見えるから、この方が本曲よりは流布していたらしい。既に鞍馬判官の解題(未刊九の二二頁)で述べたように、鞍馬判官は後半が稚拙なので、本曲は十七世紀頃に鞍馬判官を改作したのではないだろうか。本曲の後半は能としても一応面白くとのっている。しかし觀世小次郎信光作の佚曲「盛長」とは別曲と考えられる。即ち鴻山文庫本『曲海』所

収の信光作らしい下歌・上歌の謡物「盛長」の詞章が、本曲にも鞍馬判官にも見えないからである。曲海所収の謡物「盛長」は『未刊謡曲集』六の「花の宴」の解題二三頁に翻刻した。

東心坊(とうじんぼう)異本。貞享二年(一六八五)版二百番外百番本(謡曲全集下巻・謡曲叢書第二巻に翻刻)所収曲の異本。前段は版本では子方が鶴松となっているが、異本では鶴若となっている外に小異程度であるが、後段は大異で、キリは全く別文となっている。①版本系には、仙台本第二種・国学院本第四種・家藏浅葱表紙本などがある。②異本系には、福王流系の家藏樋口本・能勢本(底本)・吉田本・平松本・福王本第二種・同第三種・井上本第一種・同第二種・同第三種などがあり、更に小異はあるが、国学院本第一種・観世本(「主馬殿本寫」と註す)・五百番本などがある。五百番本には張紙で版本系の本文も記して居り、内題は「東尋坊」とある。外に未調のものに、浜本本・天理本第二種(三百五番本。近世初期頃寫し)・京大本第二種・上杉本(内題「東心房」)・八戸市立図書館藏南部本・元文寫本(関東大震災で焼失)などがある。

本曲の渡り拍子の小歌の所は現行曲「藤栄」所収のそれと節附までも殆ど同じであるが、藤栄は永享二年（四三〇）の『申樂談儀』に既に見える古曲（自家伝抄に世阿弥作、能本作者註文系諸本は作者未詳）だから、本曲は藤栄のを借用したと思われる。近世の名寄類では、貞享四年（一六八七）版『能訓蒙図彙』所収の「謡目録国付」以下の諸名寄に、主として「東心坊」、稀に「東心房」「東心方」として見える。

近世初期頃寫しの家藏浅葱表紙本には朱で「シテ沙門 水衣 アツ板 大口
（厚）
 ジュズ 扇 面越前べしみ トカウ シテ後 赤頭 白頭ニテモ 法被 半
（かしら）（はくとう）（はつび）
 切 唐織 子リ ウチ枚 鶴若（浅葱表紙本文には「鶴松」とあるが、「松」に朱で「ワ
（童折？）
 カ」と傍訓） 掛スヲウ 大口 小ユヒ 扇 ワキ スヲウ」と註し、奥にやは
（素）（襦）
 り朱で、「元禄十年丁丑（一六九七）正月十七日之夜直方勤之 文句悪しき所糺之」と
（これをたまたす）
 註している。そしてこの註の通り、鶴松をすべて鶴若に朱で訂正し、更に、版
 本系の「のみをはずし。しづめにかけたる、うれしさよ」の次にあるシテ詞の
 「こは何事ぞ……」以下、地の「俄に川ぎり立くらがり」までを朱で消して、
 代りに朱で、「シカ／＼ いかに申上候 東心坊ヲしづめにかけて候 ワキ」一

段にてある シカ／＼ や 何とやらん川浪あらく物すさましく 東心坊のわざと見えて候 ワキ『げに／＼みれば川岸の 浪風あらく立くらがりて』と訂正し、あと同吟となつて「風すさましくめいどうするこそおそろしけれ」に続いている。

また文政七甲申年（二八四）八月中旬平松甚三郎時美寫しの石田元季氏旧藏『笛手附』（仮称）下巻には、「東心坊」と題して、「名ノリ笛 是は越前の宰府 太刀持 シカ／＼セリフアリ シテ只出ル也 是は此寺の東心坊と申 詞セリフアリ跡 はや御共（共）難読申て候 舟出ル 渡拍子 子方イヅル 更科越路の月雪 半掛（ひ）り舞 中入 早舞遊ぶ其中に 舞アルカ めいどうする社（こ）おそろしけれ 早笛 打上 切水中に入てぞ 留高（トメの高音の意）と、笛の頭附（かしらづけ）と簡単な演出が見えるが、これは版本系にはほ一致する。右の諸資料から見て、本曲は室町末か近世初期頃の、東心坊伝説に取材したもので、上演されたこともある小品佳作であると言えよう。

桃青（たうせい）姫路の福王流ワキ方江崎家藏の近世中期頃の観世流節附版本が